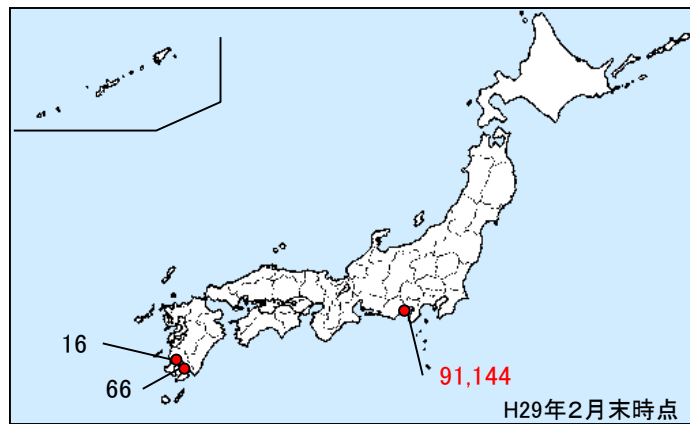


海外まき網漁業

漁業種類の概要

中西部太平洋やインド洋において、船団を組まずに349トン型を主体としたまき網漁船1隻で主にかつお・まぐろを漁獲。一航海は35～45日であり、年間7～8航海の操業を実施。



計画数: 4件 (実証終了: 2件、実証中: 2件、実証予定: 0件)

取組と成果

【生産向上】

- 広範で気象・海象が複雑なインド洋において、FADs(集魚装置)の共同管理、ヘリを活用した漁場情報の共有等、760トン型2隻の連携による新たな漁場の確保。
- 入漁料が高騰している太平洋島嶼国水域において、複数隻グループ化によるVD※の有効利用、漁場情報の共有、外地転載による運搬船を活用した操業効率の向上。

※VD: 1隻が1日あたり操業する単位。毎年操業に必要なVDを島嶼国から購入。

- 太平洋島嶼国と合併し、外地基地操業による操業効率の向上。

【コスト削減、省力化・安全対策】

- SGプロペラの装備、燃油リアルタイムモニター設備を採用した改革型漁船等によるコスト削減。
- 海まき船で初めて導入したスクープマスター方式等による、凍結魚倉から保冷魚倉へ漁獲物の移動作業の省人化。

【販売経路・高付加価値化】

- 漁獲物の2ヶ所汲み取り方式、冷海水予冷による鯉節向け原魚冷凍システムを採用し、高鮮度の鯉節原料を供給。
- 低脂質のインド洋産カツオを活用したブランド化。

【地域貢献・魚食普及】

- 鯉節の主産地である焼津・枕崎・山川地域へ良質な鯉節原料を安定供給。

【資源管理】

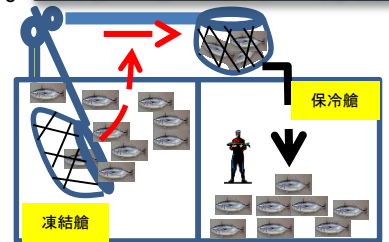
- FADs操業を極力削減し、素群れ主体の操業や大目網を使用した操業を実施することで小型まぐろ類の漁獲を削減。

ヘリによる漁場探索



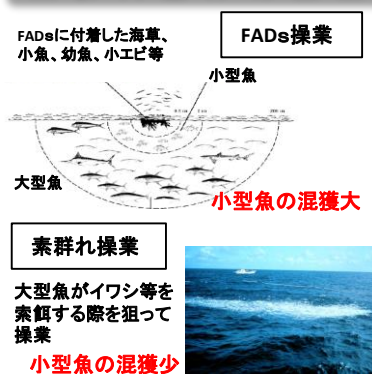
広域な漁場探索

スクープマスター方式



魚倉内での人力による作業の減少

素群れ主体の操業



小型魚の混獲少

今後期待される取り組み

- もうかる漁業で実証中・実証済の取組を行い、海外まき網漁業の持続的な発展を確保。

- ・ 外国漁船に劣らない船型により、国際競争力を確保。
- ・ 他海域との併用により、中西部太平洋水域への依存度を軽減。
- ・ 島嶼国との合併により、漁場を確保。
- ・ グループ化による、VD利用の高度化、漁場情報の共有等による操業体制の効率化を実施。

760トン型漁船

